

『シベリア鉄度に向かって』

もう 20 年も前のことである。学生時代、いろいろな外国語に手を出していた私は、とりわけスラヴ語派の諸言語に熱中していた。格変化と呼ばれる複雑な語形変化を特徴とする言語で、ポーランド語やセルビア語など複数の外国語に手を出したが、特にスラヴ語派の中でももっとも話者が多いロシア語に力を入れていた。

1 年生の時には、とある交流団体の企画で、シベリア最大の都市に住むロシア人の一般家庭のお宅にホームステイする機会を得たが、そこには日本語を専攻する大学生のひとり娘アーニャがいて、彼女が何かから何まで世話を焼いてくれて、私は自分のロシア語力をあまり試すことができなかった。

そこで、大学 2 年生になると、今度は自分ひとりで時間のある学生時代にしかできない旅をしようと、シベリア鉄道に通しで乗る 6 泊 7 日の旅をすることにした。復路では途中下車して、アーニャの一家にも再会できる。

まずは鉄道の始発駅である極東の都市ウラジオストクへと向かわなければならない。日本からの直行便はない。そこで海路で渡ることにした。今ではその航路は廃止されてしまっているが、当時、富山県の伏木港から韓国を経由して極東の港湾都市ウラジオストクへと至る、2 泊 3 日の船舶路線が就航していたのだ。

私は大きなバックパックを一つ抱え、東京でひとり暮らししているアパートを始発で出て、快速列車や普通列車を乗り継いで富山県の伏木港へ向かった。市内の道路標識には、日本語・英語に加えて、ロシア語のものが多くこの街の特徴である。港へ着くと、乗船を待つ多くのロシア人に加え、何人かの日本人大学生がいた。私たちは自然と集まって、お互いの自己紹介をした。

某有名私立大学法学部で学び、ともに旅のサークルに入っているという女性 3 人組。彼女たちと知り合いではないが、同じ大学の湘南にあるキャンパスで学んでいる男子学生。彼らは皆、私と同年であることがわかった。海外旅の経験豊富な彼らに加えて、関西の私立大学からやってきた、今回が初めての海外だという一つ学年が下の男子学生もいた。

船に乗り込むと、もうひとりマキさんという、少し年長の日本人女性が乗っていることが伴明した。しばらくアメリカにいた旅慣れた女性で、あまり自分のことを語らず、ハイキングに行くかのような軽装で私たち学生を驚かせた。ひたすら陸路でイランまで行くのだと言う。このマキさんに関西の大学生は一目惚れし、しばしば彼は私たちからかわれることになった。彼らのいずれもが、目的地こそ違うけど、シベリア鉄道に乗車するのが目的だった。

出国手続きは荷物にほとんど注意が払われることなく、空港でのそれと比べると、恐ろしくいい加減なものだった。乗客は、極東と日本を行き来して仕事をしているロシア人がほとんどである。実はこの船には、ロシアで売られる中古の日本車が満載されていた。数年後、ロシアの関税が引き上げられたことが原因で、この航路は廃止されることになる。

船の中は、シベリアにある世界遺産の湖の名前にちなんだビールが売られているなど、

すでにロシアといった雰囲気である。食堂には、ビーツを使ったお馴染みのスープ料理や一通り定番のロシア料理を味わうことができた。そして夜になるとロシア人は、ディスコと化した食堂で、連日気怠そうに体を揺らしていた。船では特に、することもなかったのだ。

同世代の日本人たちはすっかり仲良くなった。ウラジオストクの港に着くと、ひとり湘南の大学生は日本での再会を約束して、大学の先輩である駐在員の元に身を寄せるということで足早に去っていった。数日滞在したのち、シベリア鉄道でモンゴルへ入り、子どもたちにそろばんを教えに行くのだと言う。

残りの全員は翌日の昼過ぎに出発するシベリア鉄道に乗る。マキさんは宿も取っていなかったが、学生たちは全員が同じホテルを予約していた。数年後、この町では APEC が開催されることになり目覚ましい発展を遂げることになるが、この時はまだホテルもそれほど選択肢がなかった。実は当時、原則としてホテルを予約せずにロシアのビザを取得することは出来なかったが、彼女は裏技に知悉していた。

ロシアが初めてでないのも、ロシア語が分かるのも私だけということで、まずは港に残った日本人皆で街を散策することにした。これから、多くの出会いと別れが待っている。夏休みも旅も、まだ始まったばかりだった。